
魔法少女リリカルなのはSatan blazE

なるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSatan blaze

【Nコード】

N3101P

【作者名】

なるち

【あらすじ】

ゆりかごが軌道上に到達するまであと僅か。

それを阻止するため局員たちは戦う。

そんな状況下でなのはもまた、玉座の間で聖王ヴィヴィオと戦っていた。

圧倒的不利な中、玉座の間に蒼い炎をその目に宿した少女が現れる。

まるで青い絵の具を水で薄めたかの様に、明るい色が天を彩っている。周囲を見回せば視界の下半分程は雲のような白が存在している。

「じじは・・・、何？」

その空間には1人の少女が佇んでいる。

下ろしていれば、おそらくは肩甲骨あたりまでは届くであろう黒髪をポニーテールにしている。

青味掛かった灰色のパーカーの下には、胸のあたりに紺色をした星がデザインされた白いシャツを着ている。下は膝上20cm程の紺のタイトスカート、黒のオーバーニーソックス着用して紺と白のスニーカーを履いている。

一見すればどこにでもいそうなただの少女に見える。いや、むしろそうとしか見えない。

少女は周囲をキョロキョロと見回しながら一歩、また一歩と歩み出す。それはどこかに向けられたものではない。目的の場所など無く、ただ前へと踏み出したに過ぎない。

そしてこの瞬間にもゆっくりと前へ出るその脚が戸惑いを、胸の前で握られた両の手が不安を表している。

「ん？」

そんな中、少女が手がうつすらと青味を帯びた光を放ち出す。

いや、違う。光っているのは少女の手ではない。握っているその小さな手の中にある物だ。少女が手を開く事をしないたためそれが何なのかは分からないが。

「守りなさい」

「え？」

少女の耳に声が届く。少し掠れたような、でもどこか透き通っているような不思議な声。

ただ何となく、少女は心を包み込むような暖かさを感じとっていた。

上方より人が降りてくる。空中に浮いているであろうその人物は途中で下降を止め、少女の前まで来ることは無かった。

長い黒髪をツインテールにして黒のロングコートを羽織っている彼女は、上半身にコート以外何も身につけていないのか、肌が露出している。よく見れば胸の部分に面積の小さな黒い布が当てられているが、それだけだ。

下は黒のショートパンツを穿き、黒のブーツを履いている。やはり露出が多い。

「あなたが守るべき人を助けなさい」

すると下降を止めていた彼女は再び下降を始め、少女の目の前までやって来る。と同時に、少しばかり少女の身体も自然と浮き上がり、彼女と同じ高さに浮いている。

少女は目の前の彼女を直視する。

何故なのかは分からない。だが少女には彼女が酷く自分に似ていると感じられた。

見た目も随分と似ているのだが、そういうことではない。何かもつとこう、根本的な部分で似ていると感じるのだ。

元々1つだったモノが2つに分かれ、それが再び1つに戻ることで自分の中の何かを埋める様な感覚だった。

「あなたは誰？」

「・・・」

「誰なの？ あなたは・・・」

彼女が答える事は無く、ただ目を瞑った。それにつられるかのようにな少女も目を瞑る。

何かが少女を引き寄せる。物理的な物ではなく、感覚的に感じているだけなのかもしれない。

「私は」

彼女の存在をこれ以上ないというくらい近くに感じた瞬間、声が聞こえた。そして。

世界はただ一つだけではない。次元世界。それは動物だろうが植物だろうが、はたまた無機物だろうが関係無く、惑星だろうが宇宙だろうが全くの例外は存在しない。故にこの世のありとあらゆる存在全てを内包する最も上位の構造体なのである。

次元世界にはいくつもの『世界』というものがそれぞれ異なる次元に存在している。それ故に異なる世界同士が干渉し合うことは通常ありえない。

だから大半の生命はそれを知ることなく一生を終えていく。

お分かりだろうか？ 『大半の生命は』ということは、それに当てはまらない生命はどうだろうか。結論を言ってしまうればそれらは『知っている』に分類される。

通常ではありえないことなのに何故なのか。それは彼らが『魔法』というものを扱えるからである。

一口に魔法と言っても、決して俗に言う奇跡のような現象ではない。魔法とは、自然摂理や物理作用をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで、作用に変える技法である。

要するに科学を物凄く発展させた先にあるのものなのである。ただし、魔法の運用には使用者の魔力を必要とする。それは体力と同義のものではあるが、誰しもが持っている訳ではない事は言っておこう。

そして魔法を使えるが故に彼らは世界と世界を行き来することを可能とし、世界と世界の間が存在する次元空間にすら進出している。第一世界ミッドチルダと呼ばれる世界がある。第一世界とはいっても、最初に誕生した世界という訳ではなく、ミッドチルダが管理局発祥の地であるが故。

管理局というのは正確ではなく、時空管理局というのが本当のところ。それは次元世界から質量兵器の根絶とロストログアの規制を働きかけてきた組織。

そして今、そのミッドチルダひいては次元世界に未曾有の危機が迫っていた。

某所

ただ広く、とにかく広いだけの薄暗い空間。そこには1辺数十センチメートルから数メートル程度の、薄い正方形をした足場だと思われる大小様々な板が無数に浮かんでいる。

この殺伐とした空間に4つのカプセルがある。それらの下部に付けられている金属部品やらコードやらが、下へ下へと伸びている。

カプセルがあると言つのはいささか間違っている。『カプセルだ

った物がある』というのが正しいか。

と、そこへ無数にある正方形の板が1つ接近してくるではないか。それには管理局の制服を着ている事からおそらくは局員なのである。女性が立っている。

「なっ!?!これは一体・・・」

女性は驚きのあまり目を見開いている。どうなっているの? と女性の頭には疑問詞が浮かび上がる。

カプセルのガラスは砕け散り、詰まっていた液体は台から滴っている。

そして中に入ったモノは無残にもすぐ近くの台に落ちていた。薄暗いこの空間でははつきりとは断定できないが、人の手の小指程度の太さをしたモノが一か所にグニヤグニヤに集められたようになっている。

一目見ただけでもかなりの長さがある様に見えるそれは、形が崩れていて判断し辛いが人間の脳ではないだろうか。

真横に等間隔で並んでいる3つのカプセルは例外無くそうなっており、それらの後方にあるもう1つのカプセルのみが、割れているだけの状態だった。

同じように中に入っていたモノは下に落ちていつてしまったのか、はたまたそれには何も入っていなかったのかは分からないが。

今更になつて女性は脳が飛び出している3つのカプセルの後方にある存在を思い出したのか、ハッとされたようにそちらへ視線を向けた。

「まさかアレが? でもアレが目覚める筈は・・・。仮にそうだとしても、まだ調整は完全では無いのにどこへ・・・」

何かが気に障ったのか、女性は腹立たしそうな表情を浮かべる。

険しい表情のまま周囲を見回しているが、特に何があるわけでもない。あるのはただ、無様で無残な姿に成り果てた、と言えるのかは分からない3つの脳だけだった。

用が無くなつたからなのか、興味をなくしたからのか、はたまたその中身を探すためののかは分からない。

ただその女性は冷酷さを宿した瞳のままその場から去っていった。

いくらかの雲が浮かんでいるものの、天気は極めて良好だ。ピクニック日和とっていいだろう。

しかし晴れた空には大きな大きな船が存在している。船が空を飛ぶというのは、管理世界ではそう珍しい事でも無く、むしろ当たり前のような出来事だった。

それだけならば大した事でもないのだが、今問題となっているのはこの船が世界に危機をもたらそうとしていることなのである。

船の名を『ゆりかご』という。詳細を挙げだすとキリが無いので問題となっている点を挙げよう。

ゆりかごが衛星軌道上に達すると二つの月から魔力を受け、高い防御性能を発揮する。それと同時に精密狙撃や魔力爆撃など強力な対地・対艦攻撃が可能になるほか、次元跳躍攻撃さえも行えるようになる。また、大気圏内、宇宙空間だけでなく、次元空間でも航行可能かつ戦闘可能な戦闘艦なのである。

そしてそれを行おうとしているのが広域次元指名手配犯、ジェイル・スカリエツィだ。

彼は犯罪さえ犯していなければ歴史に名を残す程の天才科学者なのだが、今更それを覆す事は出来ない。

管理局が今すべきことは2つ。ゆりかごの破壊と、スカリエツィ一味の確保だ。そしてこの場において行われているのがゆりかご破壊のための作戦。

既にゆりかご内部にはいくつかの部隊が突入しており、彼らの帰還を待つ状況になっている。

しかしただボクと待っている訳にはいかない。ゆりかごの周りにはスカリエツティが制作した無人兵器・ガジェットが大量に飛びまわっており、これを撃墜するのが外に居る部隊の役目だ。

その部隊に指示を飛ばしつつも戦っている1人の少女が居る。白と黒で構成された防護服　　バリアジャケットを着て、頭には白い帽子を被っているダークブラウンの髪をしている。

右手には金色の杖を、左手から少し浮いたところに表紙が茶色の本があるのも特徴だろうか。

「あかん。こんなにおつたらどれだけ攻撃しても全然減った気がせえへん。やっぱ大元をどうにかせえへんとあかんか・・・」

戦闘機を模した形状をしているガジェットは？型と呼ばれている。それらが編隊を成して大量に飛行しているのだから嫌でも視界に入ってくる。

それらを撃墜し、指示を出しているこの少女　　八神はやての表情は焦りからどんどん険しくなっていく。

時間を要すれば要する程、魔力を消費していくわ疲労が蓄積されていくわで、管理局側は不利になっていく。

しかもその上、突入部隊がゆりかごの主要箇所である『動力炉』及び『玉座の間』を制圧しなければ、ゆりかごを破壊するためミッドチルダへと向かっている次元航行艦隊の到着に間に合わないのだ。

自分が出る事はあまりに少なく、それ故に焦りと苛立ちを感じずにはいらなかった。

それからしばらくガジェット撃墜のための戦闘は続いた。だが、やはりというか、一向に数が減っているようには感じられない。

「しゃあない、こうなったら私の内部なかに　　っ、なんやあれは・・・」

いい加減に痺れを切らしたはやてがゆりかごに突入しようかと思つた時、遠くの方から人間大の蒼い光が接近してくる。

やけに見覚えのあるものだった。いや、見覚えどころかよく知っている。何しろ、今自分が戦っているガジェットが攻撃してくる際に放つ蒼いビームの様な光と酷似しているのだから。

「まさか砲撃型のガジェットか！？　味方も巻き込むなんて・・・いや、仲間意識があるかどうかなんて分からんけど」

その蒼い光は一直線に進む。その直進上にあるもの全てを巻き込みながら。それが局員だろぅがガジェットだろぅがお構い無しで、まるで障害となるものは全て破壊すると言わんばかりだった。

はやての所に向かつてきている訳ではない。それならば既に迎撃体勢に入っている。だから、どこに向かっているのかと思い、その進行方向へ視線を向ける。

そこには、ゆりかごがあった。

「まさかゆりかごに？　そうやとしたらガジェットと違うんか・・・あかん、考えても分からへん。とにかく私も突入や」

『待つて下さい八神部隊長！』

「アルト？　どないしたんや？」

『突入の前にお届けモノです！』

「っ！おおきに！ありがとうな！」

通信を入れてきたのは機動六課所属のアルト・クラエッタ二等陸士。元々は通信士として所属していたが、とある事情によってこの決戦においてはヘリの操縦を担当している。

そんな彼女が映っているモニターには、白銀の髪をして白い服に身を包んだ小さな小人が映っていた。

手短に通信を終えたはやてが再び先程の蒼い光に視線を戻そうとしたとき、大きな爆発音が耳に届いた。

「どうなったっ!？」

どうやら蒼い光はゆりかごの外装に激突したらしく、一部から黒煙が上がっている。

だがそれだけだ。それ以外、特にダメージを与えた様には見えな
い。

「誰の砲撃か知らんけど、その程度じゃあかん……。リイン、早く来てや。なのはちゃんとヴィータを助けに行かな」

もうあと少しで来るであろう頼もしい助っ人を待つこの時間が、
どうにももどかしかった。

ゆりかご内部 玉座の間

ここにはたった2人しかいない。1人は肩を揺らして激しい呼吸をして黒いバリアジャケットに身を包み、長い金髪を右サイドアツプにしたオッドアイの少女。彼女は何故か涙を流しながら、壁を睨みつけるように見ている。

その先には1人の女性の姿があった。白いバリアジャケットに身を包み、明るい色の茶髪をツインテールにして、右手には到底杖とは思えない、むしろ槍に近い形をした杖を持っている。

しかしこの女性、壁にめり込んでいる。比喻とかではなく、本当にめり込んでいるのだ。度合いは少しだが、そうであることは確実

だ。
壁、床問わず生じている亀裂を見れば、どれほど激しい戦闘が行われていたかが手に取る様に分かる。

「ぐっ……」

ダメージが溜まっている身体に鞭を打ち、無理矢理にでも身体を壁から引き離す。苦しそうな表情を浮かべている様からは、相当辛いであろうことが伺える。

この女性こそがはやてが言っていた『なのはちゃん』である。金髪少女の方は『ヴィータ』……ではなく、ゆりかごを動かすための必須条件である聖王なのだ。名をヴィヴィオという。

古代ベルカの時代、王であった聖王家一族がこのゆりかごで生まれ、ゆりかごで死んでいくことからこの船は『聖王のゆりかご』と呼ばれている。

しかし古代ベルカは既に滅んでおり、古代ベルカ式の魔法を使用する者はいるが、現代に聖王が存在するはずがない。

現代にはクローン技術が発達しているのはご存じだろうか？ 遺伝子を採用して同じモノを作り出すというあれだ。

それを用いて造られたのがヴィヴィオなのである。故に現代に生きながら、聖王家一族の血がその身に流れている唯一の人間なのだ。さて、そのヴィヴィオだが、ロストロギア・レリックと融合させて今や操り人形と化している。

そんな彼女がなのはにトドメを刺そうと、振り上げた右手で彼女独特である虹色の魔力弾を作り出した時、爆発と共に壁が吹っ飛んだ。

なのはが背にしているのが、ヴィヴィオから見て入口の右側の壁。その反対の壁が何の前触れもなく突如として吹き飛んだのだ。

「っ……」

「な、何っ!？」

戦闘中でも2人の視線は自然にそちらへと向けられる。

大きく開いた穴からはカッソ、カッソというゆっくりした靴音と共に、少女が姿を現した。

長い黒髪をツインテールにして黒のロングコートを羽織っている。その前は胸の上辺りで止められているだけなため、胴体の露出度は極めて高い。

黒のショートパンツと同色のブーツを履いていて、こちらも太ももを丸々と露出する格好になっている。

だが、そんなところに2人の目は行っていない。彼女の左腕、そして左目の2点に意識は集中していた。

左腕。そこには黒く、光を鈍い色で反射する大きな物体が存在している。彼女の身長に近い程の長さがあるそれは先端に穴があり、大砲を連想させる。

左目。そこには悪魔が発するような不気味な蒼色の炎が宿っている。

病人のように白い肌と黒系統で統一された服、そして左目の蒼炎と左腕の武器が　彼女というものを構成しているモノ全てがより一層、彼女を悪魔らしく演出している。

「あなたは・・・、一体？」

「・・・・・・・・」

少女はもつともな疑問を投げかけてきたのはに、ちらっと一瞬だけ視線を向けた。しかし然して興味も無いのか、用が無いのか、理由はともあれヴィヴィオへと視線向けた。

すると答えない少女に苛立ちを感じたのか、今度はヴィヴィオが声を荒げて問いかけた。

「お前は誰だ！」

「私は……、あなたを守るための剣」

「私、を？」

不味い！ 不味い事になった！ なのはは焦燥感に駆られる。

聖王を守るための剣だというのなら、この少女は聖王ヴィヴィオを守るためにここに来た事になる。そうであるならば間違いなく自分の敵に回る。

アレを行いながら聖王と化したヴィヴィオを相手にするだけでも厳しい状況だというのに、増援が来たとなれば状況が一気に変わってしまう。

どうすればいい？ 打開策は？ それを考えるも何も見つからない。

たった1人の増援が齎した効果は絶大だった。

「そう、だからあなたを守る、助ける」

「っ！？」

いきなりだった。少女が左腕の砲身 ロックカノンをヴィヴィオに向けたかと思うと、そこから蒼い光が放たれる。

不意打ちとも言えるような攻撃にヴィヴィオは反応できず、真正面から受けてしまい、一瞬にして壁まで吹き飛ばされた。

その光景を、なのははただ茫然と見つめていた。

敵だと思っていた少女が突然ヴィヴィオを攻撃したことに思考が付いていかない。

「ぐ……」

ヴィヴィオはよろけながらも立ち上がる。その時に気が付いた。

「私が・・・、ダメージを？そんな、まさか・・・」

そう、ありえない。普通ならば決してあり得ないことだ。

聖王たるヴィヴィオには古代ベルカ王族が遺伝子レベルで所有している防衛能力がしつかりと受け継がれている。五体を武器化するという古代ベルカの戦乱の歴史の中で編み上げられた資質『聖王の鎧』。

優れたた兵器であることと生存することが求められた聖王血統保有者に遺伝子調整を尽くして付与された防衛機能だ。

それは本人の意志とは無関係に発動し、危険や危機からその身を守る。

とにかくちよつとやそつとの攻撃では傷一つ付かないという、とんでも能力である。

なのに今、ヴィヴィオはダメージを負っている。信じられない出来事に本人が一番驚いている。

「お前、何をした！」

「魔力変換資質、炎熱」

「そんなもので私にダメージが入るわけが無い」

「私のそれは特別で、別名『サタン・ブレイズ悪魔の蒼炎』」

「サタン、ブレイズ？」

「ベルカ王族が遺伝子調整されて、聖王の鎧という最強の防御能力を付与されたのと同じで、最強の攻撃能力として付与されたのが悪魔の蒼炎。いくらかは軽減されるけど、聖王の鎧すら貫通する」

何者だ？ とヴィヴィオは問う。

聖王の鎧は古代ベルカの時代に編み出されたもの。もし悪魔の蒼炎がそれに対抗するための物だったとすれば、同じく古代ベルカの時代に編み出されたモノということになる。

だとすればこの少女は誰だ？ 昔の人物？ それはまずありえな

いだろう。何百年も生きるような人間はいないのだから。

「私はベルカ最強の騎士、ブラック ロックシューター」

やはりか、と思う。おそらくは自分と同じように昔の人物の遺伝子を元に造り出された人造魔導師、ということで一応納得した。

この時、なのはの思考もようやく追いついた。しかし分からない。ベルカの騎士だというのなら、何故ヴィヴィオを攻撃するのだろうか。別に管理局に所属しているわけでもないというのに。

可能性としては聖王に恨みがある、といったところか。そういった記憶を植え付けられているか、精神操作をされているなら分らないかもしれない。

だがこの少女　ブラック　ロックシューターからはそういったものは感じられない。

「どうしてヴィヴィオを攻撃するの？　あなたはベルカの騎士なんでしょ？」

「聖王陛下が助けを求めているから。眠っていた私の心に酷く響いてきたから」

「ヴィヴィオが・・・」

「黙れ！2人ともまとめて！」

ヴィヴィオがブラック　ロックシューターに詰め寄ろうとした時、再び砲身が火を噴いた。蒼い炎がヴィヴィオに向けて一直線に飛んでいく。

「くっ！」

今度は寸前でのところで左へ飛んで回避した。床を強く蹴ったがために距離が出来てしまい、ブラック　ロックシューターからすれ

ば恰好の的でしかない。

即座に砲身はヴィヴィオを捉え、砲門が火を噴く。だが今回は単発ではなく何発もの連射が行われ、ヴィヴィオが回避した蒼炎弾は壁や天井に着弾し、簡単に破壊していく。

荒々しいそれは射撃というにも砲撃というにも無理がある。いかなればそれらの中間あたりの攻撃だ。故にそれなりの威力を有しているため喰らう訳にもいかず、妙な緊張感があった。

しかしヴィヴィオは雨霰のごとく放たれる蒼炎弾を器用にかわして潜り抜け、距離を僅か数メートルまで縮めた。

勝った。ヴィヴィオは確信に近いものを感じていた。相手は射撃型。近接戦闘に持ち込めば勝ちだと。しかし

「何っ!？」

瞬間、砲身が形状を変えた。銚のような、太い槍のような姿
ブラックブレードになったそれでヴィヴィオを迎撃する。

接近してくるヴィヴィオを薙ぎ払うように左から思いきり叩きつける。

普通ならば抵抗も許さずに吹き飛ばしてしまような一撃だが、ヴィヴィオは右腕を盾にして容易く受け止めてみせた。

そしてお返しにと言わんばかりに、魔力を乗せた左拳を突き出す。

「はあっ!」

「ぐっ!？」

本来なら拳が到達するはずだった腹部を庇うように、咄嗟に右手を出して蒼炎を纏わせた。

だが悪魔の蒼炎は攻撃時にこそ真価を発揮するものであり、相手の攻撃を自分の攻撃で無効化するのが本来の使い方なのだ。

しかし今はそうも言っていられず、まともに受けるよりはいいと

いう考えで防御に回した。

結果としていくらかは軽減したものの、やはり防ぎきれぬものは無かった。

「あつっ!？」

吹き飛ばされるはずのブラック ロックシューターだが、そうはならなかった。ヴィヴィオがブラックブレードを掴んでおり、距離が開くことを許さない。

ブラックブレードを引つ張り、吹き飛びかけていたブラック ロックシューターを引き寄せると、再び魔力を込めた拳がフックのように放たれ彼女の右の頬を正確に捉えた。

今度はモロに入ってしまった、ヴィヴィオがブラックブレードを離していたこともあって、先程ヴィヴィオが突っ込んだ場所のすぐ右に激突した。

「ヴィヴィオ!」

「っ!？」

玉座の間に大きな声が響いた。自身が殴り飛ばしたブラック ロックシューターに、ざまあ見ろとでも言いたげな顔を向けていたが、反射的にこの方へ振り向いた。

すると桜色の魔力弾 アクセルシューターが4発、自身に向かってくる様が見て取れた。後ろに飛び退くと今まで自分が居た場所に着弾し、強い衝撃が床に亀裂を生じさせる。

ヴィヴィオとの距離が出来たのを確認したうえでなのははブラック ロックシューターの方へ意識を向ける。

一撃目はいくらか軽減していたとはいえ、二撃目は直撃している。あれだけの威力の攻撃を受けて無事だとは思えない。心配したなのはが彼女の方へ一歩踏み出した時、すぐ横を蒼炎弾が通り過ぎ後方

に在った壁を吹き飛ばした。

「え？」

「邪魔をしないで」

「で、でも！」

ブラック ロックシューターはそれ以上何も言わず、ヴィヴィオの元へ床を強く蹴り向かって行った。

1人取り残されるようにポツンと佇むのははどうしようかと考えかけて止めた。今、自分がすべきことはヴィヴィオと戦うこと以外にもあつたからだ。

「レイジングハート、エリア探索に集中するよ。いいね？」

< Yes . I agree to it , too . >

「うん」

そう、なのはが戦うべき相手はもう1人いるのだ。

それはヴィヴィオを人形のように使い、誰の手も届かない場所に隠れている戦闘機人ナンバー4、クアットロ。

それを落とせばゆりかごの上昇速度は落ちるだろうし、少なくともヴィヴィオにも何らかの変化が生まれるだろう。そうなければいくら余裕を持つことができる。

これまで戦闘をしながら続けてきたエリアサーチをそのみに絞ることで格段に効率が増す。

ブラック ロックシューターだけに戦闘を任せるのは気が引けるが、今自分に出来る事をするだけだと強く自分に言い聞かせるのだった。

一方で、ブラック ロックシューターはブラックブレードのままヴィヴィオと近接戦闘を行っていた。何度も何度も叩きつけるように振るわれるそれを、ヴィヴィオは魔力を込めた拳で弾き飛ばし

て行く。

この時、ヴィヴィオの中にあつた自信は確信に変わっていた。今のブラック ロックシューターに悪魔の蒼炎は無い、と。

事実、最初に蒼炎弾を喰らった時は確実にダメージがあつた。しかし今はどうだろう。ブラックブレードを幾度弾こうが身体どころか拳にさえダメージは感じれら無い。つまりと、悪魔の蒼炎が無い状態において、ブラックブレードはただの金属の塊でしかなかった。

もう負けは無いと、ヴィヴィオは確信を得た。さつさと決めてしまおうと左拳に力が入り、今までよりもモーションが大きくなった。

「これでっ!」

しかし、古代ベルカ最強の騎士はそれを見逃さなかつた。待つてましたと言わんばかりに、小さく、それでいて鋭くブラックブレードを左へと振り抜く。

そして振り抜き動作に入る直前、ブラックブレードに蒼炎が宿つた。激しく燃え上がるそれを纏つた一撃がヴィヴィオの左脇腹を捉えた。

「うぐっ!?!」

今までの中で一番強く吹き飛ばされ、床に激突しても尚その勢いは止まらない。小石が水面を跳ねるかのように、ヴィヴィオの身体は跳ねて壁まで到達する。

壁が大きく凹み、大きな亀裂が生じていることから、その衝撃の強さが、今のブラック ロックシューターの一撃の強さが一目で分かってしまう。

おまけに悪魔の蒼炎まで使用したのだからヴィヴィオにもかなりのダメージが入ったことだろう。当然の話だが、あくまで入ったで

あろうダメージはその一撃分のみ。床や壁に激突した際のダメージは聖王の鎧が全て防いでいるのだから。

「ぐっ　　ごほっ！」

立ち上がるうとしたヴィヴィオだったが、突如込み上げてきた嘔吐感には逆らえず咳き込む。ビチャビチャッと赤い液体が口から飛び出し床に付着した。

咳き込むと先程攻撃を受けた左脇腹の痛みが一気に増したような気になる。ズキズキと痛むそこに左手を当て、何とか立ち上がる。

そんな状態のヴィヴィオを目の前にして、尚もブラック ロック シューターは肉迫する。

「はっ！」

「うぐっ!?!」

一気に接近して右拳で左頬を殴り付け、次いで左膝がヴィヴィオの腹部にめり込んだ。

「ゴフッ！」

それらの打撃にも悪魔の蒼炎が宿っており、聖王の鎧を貫通してダメージを与える。悶絶モノのダメージにヴィヴィオは心底苦しそうな苦悶の表情を浮かべている。

さらに蒼炎を宿したブラックブレードが右雑ぎに叩きつけられた。何とか右腕を盾として間に入れるも、やはり聖王の鎧を貫通するのでは威力をいくらか軽減する程度であり意味は無かった。

再び吹き飛ばされたヴィヴィオは玉座をバラバラに吹き飛ばし、後方の壁に激突することによってやく止まった。

「わた、し、が・・・、こん、な」
「ロックカノン」

ブラック ロックシューターがそう呟くと、ブラックブレードは最初の大砲のような形状へと変化した。そして砲門はヴィヴィオを捉えている。

蒼炎弾が放たれ、ヴィヴィオのいる場所に命中して爆発を引き起こした。

ブラック ロックシューターがロックカノンをゆっくりと下ろして行く。そして下ろし終えた瞬間。

「はあああああっ！」

ボロボロになりながらも爆煙から飛び出したヴィヴィオが一気に詰め寄り、真っ直ぐに右拳を突き出す。

しかしロックカノンを下ろしただけで、警戒まで解いていたわけではないブラック ロックシューターには届かなかった。

蒼炎を宿した右手で簡単に受け止められた。ここまで簡単に受け止められたのは、おそらくヴィヴィオにかなりのダメージがある故に威力が落ちていたからだろう。

「ファイアリングロック」

「これはっ!？」

ヴィヴィオの首、腹部、両手首に両足首に蒼炎の輪が掛けられ、彼女の自由を奪った。その輪は蒼炎で出来ている証なのか、完全に輪の形はしておらず、炎が揺らめくように不安定で一定の形状は保っていない。

しかし見た目に反して強力なのか、解除されそうな気配は全くと言っていいほど感じられない。

「見つけた」

今まで蚊帳の外に居たなのは声が2人に届く。なのは視線を向ければ、彼女はヴィヴィオとは全く違う明後日の方向にレイジングハートを構えていた。

< Clearance confirmation . Firring lock is cancelled . >
「ブラスター3!」

レイジングハートの先端に魔力球が形成され、なのはの叫びにも似た声と共にさらに大きくなる。

「デイベイーーーーーン」

エクシードモードになり、通常よりも大口径化したカートリッジが5発排出され、徹底的に威力を底上げし、魔力球はより一層小さくなる。

「バスターーーーーー!」

魔力球が破裂するような音と共に発射され、ビームの如くゆりかごの最深部、クアットロ目掛けて一直線に伸びていく。

その途中、通路にあるいくつもの隔壁を全て薙ぎ払い、尚その威力を落とすことなくクアットロへと到達する。

彼女にはデイベインバスターが終末の光に見えたことだろう。

撃ち終えた後、レイジングハートの機構内部に溜まった大量の熱が、ダクトから空気が抜けるような音と共に排出される。

「なのは、ママ？」
「っ！！」

疲労で肩を揺らしていたのはだが反射的に振り向いた。
今の今まで険しい表情だったヴィヴィオは、ファイアリングロツクに拘束されながらも子供らしいそれに戻っていた。

自我は本来の状態に戻ったようだが、身体は今だレリックとの融合状態にあり、自由を得てはいなかった。

「ヴィヴィオ！」

駆け寄ろうとするなのはに、ブラック ロックシューターが行く手を遮らんとロツクカノンを出して制止させる。

当然の様なのははどいて！ そう言って進もうとするのだがブラック ロックシューターは聞く耳を持っていない。しかもその上ヴィヴィオまでが来ないで！ と叫ぶのだから足を止めざるを得なかった。

「聖王陛下は私が助けます。あなたが必要なのはその後」

「私はこの世界に居ちゃいけない。だから助ける必要なんか！」

「ヴィヴィオ！そんなこと言わないで！」

「陛下、それはあなたの本心じゃない。私には届いてる。あなたの助けてって声が」

「っ……」

「痛いし、怪我もすると思うけど、少しだけ我慢して。ロツクカノン、最大出力」

この戦いが始まって、初めてブラック ロックシューターがベルカ特有の三角形の魔法陣を展開した。足元に広がるそれはやはりとつか、蒼い色を放っている。

ロックカノンの砲門が静かにヴィヴィオに向けられ、砲身の先端から3分の1程のあたりにも同形の魔法陣が展開される。

ここにきてようやくヴィヴィオを拘束していたバインド　　フ
アイアリングロックに変化が訪れた。心は取り戻しても身体はまだ
言う事を聞かない。故に勝手にバインドに抗っている。その結果、
バインドは弱まり始め、次第に拘束力を失っていく。

その状況下でもヴィヴィオの意識は砲門に向けられていた。最初
は真っ暗だった砲門にうつすらと光が生まれ、それは次第に濃くな
っていく。

それに従ってそれが煌めき、揺らめいている事から光では無く、
悪魔の蒼炎が圧縮されているものと分かった。

それを受ける覚悟は出来ている。本人の意思では無いにしろ、母
になってくれるという大切な人を力と言葉で傷つけたことに変わり
は無い。なのははその人はきつと身も心も張り裂けてしまいな程辛い思いを
したに違いない。

それに比べれば自分が痛みを感じる事くらいどうということは無
い。怪我をするくらいどうということはない。

その程度の事で、なのはの心を少しでも救えるのなら。自分の、
母親の元に帰りたいという願いがかなうのなら。

だからヴィヴィオは言葉にする。自分の願いを。

「おね、がい……。お願い、助けて！私はなのはママとずっと一
緒に居たい！」

ブラック　ロックシューターは何も言わない。でも心にはしっか
りと届いている。コクリ、と頷くと左目に宿る蒼炎がより一層激し
さを増す。

なのははただ事の成り行きを見守っている。きつとヴィヴィオは
助かると信じて。

「サタン・ブレイズ・キャノン
悪魔の蒼炎煉獄砲」

直後、轟音と共に蒼炎砲がなのはのデイバインバスターよろしく発射された。強大な威力を持つそれはヴィヴィオの飲み込むだけではなく、後方の壁を突き破り、果てはその先にある全ての壁を撃ち抜き、ゆりかごの外まで伸びていく。

踏ん張っているにもかかわらず、あまりの威力にブラック ロックシューター自身もジリジリと後ろへ押されていく。

どれ程の時間が過ぎただろうか。最早ビームと言ったほうがしつくりくるような蒼炎砲は次第に細くなっていき、ついには糸のように細い線を描き消えていく。

実際の照射時間は10秒にも満たない程度だっただろう。しかし体感時間にすれば数分は続いていたように感じられたそれが、終わりを迎えた。

改めて玉座の間を見れば、撃ち抜かれた壁や蒼炎砲の熱によって焼け焦げた周囲が、その凄まじさを物語っている。

蒼炎砲を真正面から受けたヴィヴィオはといえば、今だ弱々しいバインドに繋がれたままになっていた。

とそのとき、彼女の胸部から赤い宝石 亀裂が入っているレリックが出現し、そのまま何をしてもなく砕け散った。同時にヴィヴィオの身体が変化を起こし、元の小さい姿へと戻った。

倒れ伏すヴィヴィオがピクリとも動かない様子からまさか、と最悪の事態を想定したなのは。それを知ってか知らずか、ブラック ロックシューターがゆっくりと歩み寄り、意識の無いヴィヴィオを右手で抱き上げると、なのはへと近付いて来る。

「私が出るのはここまで。あとはあなたが」

「あ、うん。ありがとう、ヴィヴィオを助けてくれて。あなたも怪我してるんじゃない？ どこ行くの？」

ブラック ロックシューターが差し出すヴィヴィオを受け取った。ブラック ロックシューターも少なからずヴィヴィオの攻撃を受けてダメージを負っている。彼女の怪我の心配をしていたのだが、彼女はなのはに背を向けて無言で歩いていく。

1人で先に脱出してしまっのか、それともまだ何かすることがあるのかと思っていると、突然彼女自身が蒼炎に包まれた。

「な、何っ!？」

どこまでも荒々しく、猛る蒼炎。ブラック ロックシューターの身を焼いているのだということは、直感で感じていた。

「ど、どうして!?!どうすれば」

「さっきの悪魔の蒼炎煉獄砲で、私の中にあるロストロギアが限界に達したみたい」

「ロスト、ロギア・・・」

「ブラック ロックシューター。それが私の中にあるロストロギア。・・・、私はここまで」

「え、そんな」

「陛下をお願い」

背中を向けて話しているこの瞬間も、悪魔の蒼炎はブラック ロックシューターの身体を焼いていく。しかし普通の炎では無いせいなのか、見た目は焼けているように見えないし、焦げる臭いも一切ない。

だが悪魔の蒼炎は確実に彼女の身体を焼いている。解決策がどうにも見つからず、なのははただそれを見ていることしかできない。

ならば、と。1つ思いついたことがある。

「名前を教えて!あなたが居た証を、私がずっと持つてる!お願い

「！」

なのはの呼びかけにブラック ロックシューターは少しだけ振り向き、小さく呟いた。

「……。マト。黒衣くゐマト」

「黒衣マト、ちゃん。うん、覚えたよ。絶対忘れないから」

「さようなら」

その言葉を最後に、悪魔の蒼炎は一瞬で弾けるように霧散した。

そして、もうそこにブラック ロックシューター いや、黒衣マトが居た痕跡は何一つとして残っていなかった。

その後はやてが合流し、クアットロも回収した。

船全体に魔力が全く結合しないほどのAMF空間が作り出されたが、部下であるスバルやティアナが救出に現れたことで無事脱出した。

そしてついに最後の攻撃が行われた。

次元航行艦隊がゆりかごの軌道上到達よりも早く到着しており、上昇してきたゆりかごに向けて主砲を一斉発射。ゆりかごを轟沈させるのだった。

主砲による攻撃を受け、轟沈する前にゆりかごは蒼い光に包まれていた。それはまるで、彼女の蒼炎を受けて破壊されていく様に見える。ええ。

その光景を見ながら今だ腕の中で眠るヴィヴィオをギュツと抱きしめ、彼女を救ってくれた蒼炎の騎士の姿を胸の奥に深く刻み込むのだった。

F
i
n

(後書き)

B RSが勝手に動いてくれるので予想より、遥かに早く書いてしまいました。

同時に、勝手に動き過ぎて文字数が思っていた数字の数倍になりましたが・・・

それにしても、書いてて連載作品にしたくなるくらい楽しかったです。

感想など頂けると凄く嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101p/>

魔法少女リリカルなのはSatan blazE

2010年12月5日06時40分発行